

第 107 回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成 30 年 6 月 16 日 (土)
午後 2 時 45 分～午後 6 時
会 場 コープシティ花園 4 階
ガレソンホール

I. 一 般 演 題

1 糖尿病増悪が契機となり発見された高齢者 IgG4 関連自己免疫性膵炎疑いの 1 例

鈴木亜希子, 山谷 恵一

新潟万代病院 内科

症例は 85 歳, 男性. 5 年前から糖尿病 (DM) の診断, 近医にてシタグリブチン 50mg で加療, HbA1c 7.0% 前後と安定していた. 入院 5 か月前から口渇, 体重減少, DM 増悪あり当院へ紹介入院, HbA1c 11.5% と上昇し空腹時 sCPR 0.15 ng/ml と自己インスリン分泌の低下を認めた. 腹部 CT にて膵全体の腫大, MRCP にて膵管狭細化, IgG4 863 mg/dl と上昇を認め IgG4 関連自己免疫性膵炎 (AIP) 疑いと診断した. AIP による DM 増悪以外の症状は認めず, また IgG4 関連疾患による他臓器の症状も認めなかった. ステロイド治療も検討したが, 治療による DM 増悪の可能性もあり施行しない方針とした. DM は, 基礎インスリン 1 日 1 回皮下注射にて, 緩徐な血糖コントロールとなり退院となった. 退院後徐々に sCPR 改善しインスリン必要量低下, また画像上膵腫大は軽減し, AIP は自然寛解傾向と考える.

AIP はステロイドが著効する疾患であるが, 治療によるインスリン分泌能改善効果は明確ではない. 本症例のように DM 増悪以外症状を認めない場合, ステロイド治療の適応となるかは今後症例を重ねた検討が必要である.

2 甲状腺中毒性周期性四肢麻痺で発見されたバセドウ病の 1 例

渡辺 聖央, 鈴木 克典

済生会新潟第二病院 代謝・内分泌内科

症例は 32 歳, 男性. 2018 年 3 月初め頃から両下肢の脱力と震えを自覚, 4 月中旬にサッカーをした後に左大腿痛が出現し近医受診し肉離れと診断された. 5 月初め頃から書字の際に右手の震えを自覚, 5 月 5 日にサッカーをし, 5 月 6 日に下痢, 軽い大腿痛が出現した. 5 月 7 日午前 3 時頃, トイレに行こうとした際に両下肢脱力で動けず当院に救急搬送された. 来院時は両下肢近位筋優位の筋力低下が認められた. 血液検査では著明な低 K 血症と甲状腺機能亢進症が認められ, 甲状腺中毒性周期性四肢麻痺の診断となり, 甲状腺自己抗体検査からバセドウ病が基礎疾患であることが判明した. 甲状腺中毒性周期性四肢麻痺は若年男性に多く, 基礎疾患は我が国では甲状腺機能亢進症が最多である. 本症例のように周期性四肢麻痺を契機として甲状腺機能亢進症が判明する例も少なくない. 若年男性の低 K 血症性四肢麻痺の症例では甲状腺機能検査の実施を検討すべきである.

3 未診断の Basedow 病合併妊娠に起因した一過性先天性甲状腺機能低下症の女児例

阿部 裕樹, 泉田 郁恵

新潟市民病院 小児科

未診断の Basedow 病母体より出生した, 一過性中枢性甲状腺機能低下症の女児例を経験した. 前医にて先天性甲状腺機能低下症と診断, 治療を開始され, 生後 4 ケ月時に当院に紹介となった. 前医の検査所見より中枢性である可能性が示唆されたため下垂体前葉機能検査を施行したが, TSH 以外のホルモン分泌に異常を認めなかった. また, 体重当たりのレボチロキシンの必要量は少なく, 治療開始時から増量していなかった. まもなく母